

## アーノルドの ‘The Scholar-Gipsy’ と ‘Thyrsis’

松 本 三枝子

### 序

Matthew Arnold における互いに類似した二詩 ‘The Scholar-Gipsy’ と ‘Thyrsis’ とを分離して考えることにより、これら二詩をより明確にとらえ評価できると考えたのが Dwight Culler<sup>(1)</sup> であり、Alan Roper<sup>(2)</sup> である。そして正にこれら二詩を分離、評価することにより、Culler も Roper も説得力ある各詩についての彼らの読みを提示することに成功している。又、そうすることにより、Culler が指摘するように Arthur Clough (Thyrsis) が Scholar であるという初歩的誤りから免れることができるのも事実である。Scholar は時間の外側に生きる 理想的人物であり、一方 Thyrsis つまり Clough は時間から逃れることはできず、それ故に破滅させられてしまった生身の人間なのである。それ故、この二人は確かに区別すべきである。

しかし、一旦分離してからは、一層これら二詩がまちがいなく Cumner Hills という同一の景観の中で、ある一定の年月の隔りを置いて書かれたものであることが、無視できないものとなる。それ故、Culler, Roper という先達により初歩的誤りは避けながらも、やはりこれら二詩を同一の視点から読んでみたいと思うのである。

Arnold は自らの詩を ‘narrative poems’, ‘dramatic poems’, ‘elegiac poems’, ‘lyric poems’ そして ‘sonnets’ に分類したわけだが、‘associative poetry’ という分類項目をさらに付け加えた方が良いというのが、Oliver Elton の考えである。<sup>(3)</sup> 彼に依れば、‘associative poetry’ とは Arnold 自身や

Arnold の友人、そして Arnold が訪れた場所について語るものである。Elton のこの指摘は有益である。なぜなら ‘The Scholar-Gipsy’ と ‘Thyrsis’ とを ‘elegiac poems’ として同一の叙情の下でとらえることは、先に述べたような Culler の言う初歩的誤りに陥る危険があるが、これら二詩を ‘associative poetry’ という分類の下で見ることにより、二詩の維持する空間が共通のものであることを、むしろ強く意識できるからである。又、それにより、Cumner Hills という共通の景観の中であるにも拘らず、‘The Scholar-Gipsy’ が語るものと ‘Thyrsis’ が語るものとが、いかに異なるかを明示することもできると思われる。

## I Pastoral として

これら二詩を Pastoral としてとらえることからまず始めたい。Pastoral という言葉は、Peter Marinelli の定義に依れば、「単純さを背景に置いて人間の複雑さを扱う文学なら何でも意味するようになってきている」<sup>(4)</sup> とのことである。又、彼は、「Pastoral と呼ばれるのに必要な条件は、比較的無垢であったあまり遠くない過去の一時期が、テクノロジーの発展や年をとることにより押しひしがれている苦しい現在に比べて、楽しかった時期として記憶力と想像力によって表現されているということである」<sup>(5)</sup> としている。この定義に従えば二詩は即座に Pastoral と呼ぶことができる。なぜなら、‘The Scholar-Gipsy’ においては、Scholar の二心ない希求の姿、‘Thou hadst *one aim, one business, one desire*’<sup>(6)</sup> を 喧噪な日常生活という現代病に蝕まれ、そこから逃れられぬ語り手が語っているのであるからである。又、‘Thyrsis’ においても、すでに青春を過ぎ去って久しいと思われる語り手が、青春時代を過ぎた Cumner Hills と当時彼の心を占めていた Scholar について語っているから。

執筆年代が前後するが、‘Thyrsis’ から始めれば、この詩が ‘Lament for Bion’ や ‘Lycidas’ の影響をその詩句に留めていること、又、Corydon の名が

登場すること、そして何よりも Thyrsis という Virgil, *Eclogues*, vii, Theocritus の *Idylls*, i に登場する羊飼いの名を詩の題とするという事実は、この詩 ‘Thyrsis’ が Pastoral elegy の系譜に属するものであることを物語っている。さらに ‘Thyrsis’ の解題を読めば、この詩が Edward King の死を悼んだ ‘Lycidas’、Keats の死を悼んだ Shelley の ‘Adonais’ を近い先達としていることが明らかになる。

一方、‘The Scholar-Gipsy’ においても、Cumner Hills という実在する空間に、羊飼いが群れを養い、花の芳しい香りに満ち、八月の強い日光を避けることのできるパストラル空間を重ね合わせている。

このように ‘The Scholar-Gipsy’、‘Thyrsis’ は共に Pastoral の convention を意識している。しかし、同時に Pastoral の convention の枠組を逸脱してしまっていることも見逃すことはできないのである。

## II Pastoral を越えて

### (i) 希求の旅への出発 ‘The Scholar-Gipsy’

まず ‘The Scholar-Gipsy’ から始めれば、この詩は Joseph Glanvill の *The Vanity of Dogmatizing* (1661) から、story を得たことに表向きはなっている。しかし、詩の深層に立ち入れば、この詩が Glanvill の書よりも Keats の ‘Odes’ 特に ‘Ode to a Nightingale’、‘To Autumn’ にむしろ影響されていることが認められるはずである。それはこの詩の核となっていく Scholar のイメージの創造に主に見出されるはずである。Keats の ‘Odes’ とこの詩との詩句に関する類似はずでに指摘されている。しかし、私は Scholar のイメージの創造そのものと Keats の ‘Odes’ の中で繰り広げられるイメージとの類似があると思う。そしてそれを端緒として、‘The Scholar-Gipsy’ は新たな光を発すると思われる。

Culler はこの詩を五つの部分に分けて、その最初の三スタンザを自然に満ちあふれる場面の提示としているが、<sup>7)</sup> これを私は、パストラル空間参入への

ステップとみなしたい。つまり、伝統的パストラル空間 *locus amoenus* を Cumner Hills が有することを示すことにより、この詩は始まっている。しかし、同時に Cumner Hills は伝統的パストラル空間とは呼べぬ独自の空間も有している。そして重要なことは、そのような空間もやはり語り手にとっては、パストラル空間として認識されていることである。この独自のパストラル空間は、月明りがあるのみで、夜陰のヴェールに包まれており、暗闇の枠組の中にはめ込まれたものである。そして、この空間は 'quest' と 'dream' とが重なり合わされることにより拡がっていく。もちろん、この 'quest' は、「野山がひっそりして／疲れ果てた人も犬も 皆寝しずまったころ」(p. 333) に始まる 'night quest' である。

この暗闇の中にはめ込まれたパストラル空間というのは、Pastoral の convention からは類推できない。たとえば、Virgil の *Eclogues*, i の結びで Tityrusが語るように「遠い村々の棟からは炊煙が立ち昇り、高い山々の影が段々と大きくなって落ちて来る」<sup>60</sup> 黄昏時は、憩いの時の始まりではあるが、同時に不安の時の始まりでもあり、翌朝再び太陽が上るまでは、語られぬ世界である。ところが 'The Scholar-Gipsy' においてパストラル空間が拡がっていくのは、この今までは語られることのなかった夜、暗闇の時空においてである。

一方、Scholar 自身は寡黙で物憂気な存在である。Scholar のそのような姿は 'To Autumn' における Autumn の姿につながっていく。Keats はそこで春に対する賞賛という伝統的手法を破って、秋への賛歌を奏でる。しかし、それは秋を春の如く賞賛することを意味するのではない。詩句にもあるように、秋には秋の歌がある。秋の擬人化によりその視覚的イメージが明らかになるのは、第二スタンザである。Autumn はただぼんやりと坐っていたり、うっとりとして眠入っていたり、サイダー搾りから落ちる滴をいつまでも見守っていたりする。それは、静的で非生産的な姿である。それは一年の労苦に報いられるべく収穫に忙しい姿ではなく、突如に満ちた中で収穫の手を休め一時の *otium* をむさぼる姿である。この Autumn の姿は次の Scholar の姿と重なり合っ

ている。居酒屋で農夫達が浮かれ騒いでいる中で、Scholar は黙って腰を下ろしている。陽気な渡船客に見られた彼の姿は、夢見るように物思いにふけり、Thames の流れを見つめている沈思なもの。春の快活な踊りに来た乙女達に彼がよく与える花ははかない花びらの白アネモネ。草刈りを終わって汗をおとすために水浴びに行く人達は、草の繁茂する堤に腰かける彼を見かける。労働に満ちた草刈人に対し、彼は腰かけており、その堤は草が茂っていることから示されるように 彼は *otium* をむさぼっている。この労働と閑暇の対比は、農家のおかみさんが繕いものに精を出している姿と、そのわきで門にもたれ稲こき機を見つめていた彼の姿との間にも見られる。このように収穫の手を休め *otium* をむさぼる Autumn と、活気と労働に満ちた中で *otium* に浸っている Scholar の姿は同種のものである。

そしてさらに Autumn と Scholar は共通の特徴を持っている。たとえば‘To Autumn’の第一スタンザにおいて、Autumn は太陽の力をかりてさらにたけなわの状態を迎えようとしている。第二スタンザは収穫の只中での休息であり、刈入もサイダー搾りも終わっていない。一方 Scholar も又、Cumner Hills を放浪しジプシーと生活しながら天啓という自然の力を待っている。ジプシーの秘術を手に入れそれを役立てるためには 天啓が必要である故である。それ故に、Autumn と Scholar に共通する特徴は「中途」、あるいは「道半ば」と呼ぶべき状態である。

又、そのような Scholar は Cumner Hills のそこそこに姿を現わし、いつのまにか姿を消す。彼はその景観の中に余りによく溶け込んでいる故に、ほとんど見過されてしまうような「非実体的存在」である。それは、声はすれど姿は見えぬ軽い羽根をつけた木の精、‘Ode to a Nightingale’の Nightingale のイメージにつながっていく。そして、イメージの類似のみならず、そのイメージに対する語り手の態度も共通している。‘Ode’の語り手は Nightingale に憧れ、それにより一時的にせよ恍惚を味わった。同様に ‘The Scholar-Gipsy’の語り手も Scholar に憧れ、天啓を待ち続ける迷いのない Scholar の態度に一

時の安らぎを得ている。

Scholar を「ジプシーの如く放浪し学者と同様孤独であるので Scholar-Gipsy と呼ぶのだ」<sup>(9)</sup> と考える Roper よりも、Scholar を田園 Cumner Hills の *genius loci* ととらえる Culler の方に私の立場は近いものである。

しかし、そのような「非実体的存在」としての Scholar の姿は、詩の前半においてのみである。詩のほぼ中央に位置する、「しかし、何とこれは僕の夢」(p. 338) で始まるスタンザ、それは ‘Ode to a Nightingale’ の結びの詩句、「まぼろしか、白昼の夢であったろうか／その歌は消えた——ああ、私は目覚めているのか、眠っているのか」<sup>(10)</sup> 同様、幸せなる夢と過酷な現実との断層を恒間見るスタンザであるが、それを境にして、新たな Scholar の姿が創られていく。

このスタンザ直後の九スタンザが、この詩の核となる箇所である。Culler はここで Scholar-Gipsy という vision の本質的有効性が再び主張されていると述べている。しかし、ここで述べられていることは、詩の前半で表現されてきた Scholar の姿とは異なるものである。前半においては、暗黒の枠組に入れられたパストラル空間 Cumner Hills が次々に提示されていく。そして Scholar はその道案内人である。それ故前半で語り手により重要視されているのは Scholar ではなくて、暗黒の枠組の中に入れられた独自のパストラル空間そのものである。

ところが、詩の後半においてこの価値観は反転する。そこではパストラル空間は消滅する。言い換えれば、詩の前半において、Scholar はパストラル空間の影絵であり、「非実体的存在」であったので、パストラル空間は彼にとり不可欠のものであった。しかし、後半においては、Scholar は Cumner Hills にはもはや依存せぬ、自律的存在である。

以前は四季の巡りに従順であった彼だが、今や時の流れを超越している。そして、さらに、彼が語り手を含む現代の人々といかに異なる存在であるかが示される。彼には語り手にはもはやない清新な力がある。疲労や物憂い懷疑にと

りつかれることもなく、Scholar の生は語り手の生とはおよそ異なる在り方なのだ。このようにして、Scholar は完全で理想的存在としてみなされていく。彼は、彼一人と天とで充分であり誰も必要としない。Scholar 自身が自己充足的で完結する空間としてみなされていく。

しかし、この詩はこのままでは終わらない。この詩の最後の二スタンザは、批評家により問題にされる Tyrian trader の比喩を含む箇所である。Tyrian trader が Scholar の比喩になっていることは、Scholar への呼びかけと Tyrian trader 導入のスタンザの冒頭の詩句とが互いに連関していくことから肯定されてよい。しかし、一般に比喩の持つ役割が対象をより明確に表現するためのものであると考えられる時に、この Tyrian trader の比喩は例外的であると言わざるを得ない。この詩の核と思われる中程に位置する九スタンザにおいて、先に述べたように Scholar に対する理想化が徐々に為される。しかし、その中程の九スタンザの結びは、それまですすめられてきた Scholar の理想化の行為に水をさすものとなっている。なぜなら、時の流れに朽ち果てないものとして理想化されてきた Scholar が、人間との接触を避けて逃げねばならないことになっているからである。なぜ Scholar は現代人の熱病をうつされぬよう逃げ回らねばならないのだろうか。ここにおいて、Scholar は汚され易く、破壊され易いぜい弱な者となっている。ところが、次のスタンザでその Scholar の比喩であるはずの Tyrian trader は、決断力と実行力にあふれるものとして描かれている。E. K. Brown は、この両者の逃避は静寂と離脱への願望であると述べている。しかし、Scholar は確かに逃避するのだが、Tyrian trader の出帆は逃避とは読めない。

この詩は Scholar を道案内として、暗黒の枠組に入れられたパストラル空間への誘いで始まる。詩の中心で Scholar はその空間にはもはや依存しない存在として理想化され、完全化される。しかし、彼は詩の終結部の直前になって突然曖昧な存在となって、詩は終わる。この詩を読み終えた時の Scholar の姿は、詩の中程を読んでいる時程明確ではない。詩の中で次第に明らかになりつ

つあったものを 終結部で故意に曖昧なものとしている。その曖昧さは、Tyrian trader の導入により一層はなはだしくなっている。

それ故に、G. W. Knight が「Scholar を東洋の直覚的知識の宝庫とみなし、ギリシアの知的遺産とローマによる実践的応用に対峙する」<sup>(11)</sup> とみなす説は、Scholar に対する過大評価である。又、A. E. Dyson の「Arnold の Scholar に対する態度は、大人の子供に対するそれであり、Arnold は Scholar の純粹さを羨みはしているがその無垢な状態には戻れないことを認識している」<sup>(12)</sup> という説は、Arnold に対する過大評価である。これら二説は、この詩の結末の曖昧さを補おうとする過度の読み入れである。Scholar に対する評価は、この詩の中では保留されている。それは、Tyrian trader の導入によることから、偶然ではなく必然によるものなのである。語り手にとってのパストラル空間を象徴する Scholar への評価を下さず保留したことは、Cumner Hills そのものに対する評価を保留したことになる。そして、この評価の未決が、結末の不完全さにつながっていく。それ故、‘The Scholar-Gipsy’ は未完の詩とすることができ、何らかの形で再び同一テーマの下で同一景観の中で書かれることが暗示されていると言えるだろう。そのような予兆に依って書かれたのが ‘Thyrsis’ である。‘Thyrsis’ は、Arnold の友人 Clough への追悼詩として書かれている。

#### (ii) 希求の旅の完結 ‘Thyrsis’

‘Thyrsis’ における語り手が、‘The Scholar-Gipsy’ の語り手と同一であることは、二詩を比較すれば明らかである。それ故、‘Thyrsis’ の語り手は、‘The Scholar-Gipsy’ の世界を体験したものとして扱いたい。

‘Thyrsis’ の冒頭から ‘the signal-elm’ という Cumner Hills を Scholar と共に歩き回った読者にも未知のものが登場する。しかし、これは すぐ次のスタンザで「その木がある限り Scholar は、この野原に生き続けているのだ」(p. 499) という表現で、Scholar と signal-elm の緊密な関係が提示されている。そして、signal-elm 希求の旅が、Scholar 希求の旅と重なり合うこと



により、‘Thyrsis’は進行していく。そのような過程の中で、Thyrsis がいかに扱われているかを次に示したい。

Thyrsis は、Culler の指摘を待つまでもなく、Scholar とは異なる。なぜなら、Scholar は Cumner Hills に踏み留まったのであり、Thyrsis は自らの意志でそこから出て行ったのであるから。それ故、Thyrsis と Scholar の行動は対照的である。Thyrsis はパストラル空間の外の世界を知ることにより、パストラル空間から出て行ったのであり、他方 Scholar は外の世界に満足できず、パストラル空間にやってきたのである。これら二者に対する語り手の態度は、明確である。それは、‘The Scholar-Gipsy’における Scholar に対する曖昧な態度とは異なっている。

Thyrsis は嵐が通り過ぎるのを待ち切れず死んでしまったと言うのである。彼は気のはやい絶望家であり、再び平和の時が近づいて来る足音に耳を傾けることなく行ってしまった。これらの表現には、Thyrsis の行動に対する語り手の批判が込められている。語り手は時の流れ、世の流れを四季の巡りの如く循環的にとらえている。嵐はやがて止むのであり、冬の後には春が来るというのが語り手の哲学である。従って、「死」の季節冬の後には、「生」の季節春が来る如く、自然の円環の中での死者の再生という追悼の型が予想される。ところが、そのような哲学の持主であるはずの語り手は、その哲学に則って Thyrsis を追悼しようとはしていない。さらに、Thyrsis をもはやパストラル空間の住人としてみなしてもいない。

Virgil の *Eclogues*, vii において Thyrsis に打ち勝つのは、同じパストラル空間の住人 Corydon であり、それは歌合わせにすぎない。しかし、Arnold の Thyrsis は、パストラル空間の外側で「時」により致命的に征服される。そして、Bion をさらに以前には Eurydice を黄泉の国から呼び戻すことを頼まれた Proserpine に Thyrsis の再生を嘆願しても空しいと語り手は言う。なぜなら、嘆願の相手 Proserpine は、シシリーの野原やドリス語で歌われた調べは知っている故、Bion や Eurydice には心を開いてくれようが、Thames

川の流れも Cumner Hills も知らない彼女が, Thyrsis に心を開いてくれることはないからである。それ故, ‘Thyrsis’ の中心テーマは, Pastoral convention から類推されるような Thyrsis の死と再生ではない。そして, この事実は, 語り手がその友 Thyrsis に対して必ずしも好意的でないこと, あるいは Thyrsis と語り手の間には一定の距離があることを示している。語り手の悲しみを終焉させるのは, Thyrsis の再生ではなくて, あの signal-elm の回復である。そして, それを為すことのできるのは, 語り手自身以外にはない。

‘if not I’, 「もし私でなければ」という表現の繰り返しにより, signal-elm と語り手の関係, 又 Cumner Hills と語り手の緊密さが示されていく。Thyrsis はここから出て行き再び帰らぬが, 語り手はここから離れることはできないのである。‘Thyrsis’ におけるこの signal-elm 希求の旅は, ‘The ScholarGipsy’ において, Scholar を道案内としてパストラル空間 Cumner Hills を旅した行為と重なり合う。つまり, パストラル空間の再訪である。それ故, 表層的には同一の行為を Cumner Hills において 語り手は行なっている。しかし, この同一行為が, 語り手に意味したものは, 全く異なるものである。‘The Scholar-Gipsy’ では, Scholar を道案内としてのパストラル空間の単なる道遙でしかなかった行為は, ‘Thyrsis’ ではかつての道案内 Scholar と重なり合う signal-elm 希求の旅と変化している。それは目的のある旅であり, 何を目的とするのか知る人により為される旅である。そして, ‘The Scholar-Gipsy’ においては, Scholar に対する語り手の態度は曖昧を極めたが, ‘Thyrsis’ においては, Scholar は語り手の希求の旅の目標として, 又語り手の心を占める中心的存在として明らかにされる。Scholar に対するこの評価の変化は, 当然語り手の位置の移動に起因している。

‘The Scholar-Gipsy’ において, Cumner Hills は Scholar と同様語り手にとり, 緊密な空間であった。しかし, ‘Thyrsis’ において, Cumner Hills は語り手にとっては長く訪れることがなかった故に未知の空間に戻ってしまっている。即ち, ‘The Scholar-Gipsy’ において, 語り手は Cumner Hills の

住人、あるいはそれに近い存在であったが、‘Thyrsis’においては、その空間の外にある存在である。それ故、Thyrsis と語り手とはパストラル空間の外に位置するという点では、同じである。しかし、語り手が Thyrsis との間に距離を置かざる得ないのは、パストラル空間 Cumner Hills へのこの二人の関り方の相異によると思われる。Thyrsis も語り手もかつてはパストラル空間の住人であったはずである。しかし、Thyrsis は外界の嵐に引きつけられて、パストラル空間を出奔したのであり、語り手は、その嵐の終焉をパストラル空間の中で読みとったのである。

‘Thyrsis’における語り手は、‘The Scholar-Gipsy’の場合とは異なり、パストラル空間 Cumner Hills に文字通り起居する住人ではない。しかし、語り手は、‘Thyrsis’において再び Cumner Hills をパストラル空間として認識し、その空間の存在を確認することにより、彼は、その空間をパストラル空間として保持していくことを決意している。

語り手は、今や都市の喧噪の只中に居を置いている。そして、パストラル空間 Cumner Hills への文字通りの訪れは、全くまれな事になってしまっ  
はいる。

しかし、そのような語り手に、「歩き回り続けよ！求めている光はいまだ輝いている。/証拠がほしいというのか。あの木は依然として丘の上にそびえている。/あの Scholar も懐しい丘の中腹を依然として歩き回っている」(p. 508) という「つぶやき」が聞こえてくる。このつぶやきは、Cumner Hills が語り手に意味したものを凝縮的に表現している。それは光を希求する旅である。光は時に signal-elm に象徴され、希求の旅は丘における Scholar の放浪に象徴される。

このつぶやきにより、語り手は都市の喧噪に起因する疲労や恐怖を追い立てることが できるのである。そして、‘Thyrsis’は、‘The Scholar-Gipsy’においては破壊され易い、ぜい弱な空間として描かれたパストラル空間を、都市の喧噪の只中においても再現することのできる空間として、認識できたことの表

明である。つぶやきは、確かに小さな声ではあるが、騒音に満ちあふれた都市空間には、異質な音でもあるはずだ。それ故、耳を澄ませば必ず聞くことのできる声なのである。語り手は、この時都市の只中に居て、Cumnor Hills という語り手にとっては常に希求の対象となる時空を手に入れることができたのである。

## 注

- (1) A. Dwight Culler, *Imaginative Reason* (London: Yale U.P., 1966), pp. 178-195. pp. 232-286.
- (2) Alan Roper, *Arnold's Poetic Landscapes* (Baltimore: The Johns Hopkins P., 1969), pp. 209-229.
- (3) Oliver Elton, *Tennyson and Matthew Arnold* (London: Edward Arnold & Co., 1924), p. 59.
- (4) Peter V. Marinelli, *Pastoral* (研究社, 1971), p. 4 (藤井治彦訳)
- (5) *Loc. cit.*
- (6) Kenneth Allott (ed.), *The Poems of Matthew Arnold* (London: Longmans, 1965), p. 339. Arnold の詩の引用は全てこの書に依る。以後はページ数のみを括弧内に示す。又その訳は村松真一『アーノルド詩集』(北星堂)を参考にさせて頂いた。
- (7) Culler, *op. cit.*, p. 185.
- (8) ウェルギリウス「田園詩」p. 151。呉茂一訳『世界名詩集大成・I・古代・中世編』(平凡社, 1960)
- (9) Roper, *op. cit.*, p. 219.
- (10) Miriam Allott (ed.), *The Poems of John Keats* (London: Longman, 1970), p. 532.
- (11) G. Wilson Knight, "The Scholar Gipsy: An Interpretation", *Review of English Studies*, New Series, VI, (1955), 59.
- (12) A. E. Dyson, "The Last Enchantments," *Review of English Studies*, New Series, VIII (1957), 259.